

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

・ レップ生活を振り返って〔特別寄稿〕.....	1
・ 海外ニュース.....	3
・ うちの会社.....	4
・ 委員会報告<文化厚生委員会>	5
・ 新・ パソコン外論考(其39)	6
・ 出版文化史道遙(82) 洋書の歴史雑記帳 XXXVII 1..	7

レップ生活を振り返って

石神 幸宏(文)・石神 敦子

1966年に始まった私の外国出版社レップ生活も12月末日をもって一応区切りをつけることになりました。Collier Macmillan Internationalの採用インタビューを受けるため帝国ホテルのバーで当時のSales ManagerだったNak Young Choung氏に初めて会った時、後ろのテレビのニュースではロバート・ケネディの暗殺事件を報道しているところでした。そして、初めてのソウル出張の時はアームストロングの月面初着陸に当たってしまいお会いした書店の皆様は何となく上の空でした。

レップ本来の仕事とは勿論クライアント会社の出版物を売り込むことにあるわけですが、担当する国のマーケット事情や文化的背景によって、その方法、スタイル、評価などが異り、必ずしも出版社の意向を満足させるわけではありませんでした。それについて今でも思い出すエピソードがあります。Collier Macmillanの頃、New YorkのSales Meetingにたびたび参加してましたが、その時Sales Reportに関しての指摘があり、インドのレップが書いたReportが悪い例として引き合いに出されました。彼はカスタマーの大手書店の社長夫人の入院先へ花束持参で見舞ったと報告したのですが、そんなリポートは全く無意味だと一蹴されたのです。確かにアメリカ人のSales Managerにはどの本が何冊注文されたかが大事だったわけですし、私も当時はそう思っていました。しかし、何年か経ってふと思い出したのですが、そのインド人にとっては風習も文化も仕事の一環として大変大きな意味があり当然報告すべき事柄だったと思えるようになりました。

こういう話を長々と持ち出したのも、私の担当区域が日本以外にも東アジアの国々が含まれていたからです。日本ではUnited Publishers Services社をストッ

キストとして、大手書店、専門書店があるのでレップの主な仕事は情報の敏速な伝達でした。しかし、日本以外の国々ではよりよい人間関係と信頼を勝ち取るために、ある意味では、より多くの時間とエネルギーを費やした気がします。

Collier Macmillanの頃は洋書の全盛時代で英語テキストEnglish 900が千冊、万冊単位で売れており、大型Encyclopediaが続々と出版され、書店サイドの動きも活発でした。Goodman/Gilman等の医学関係書も市場を沸かせておりました。又、米国内の小、中、高等学校のテキストの売り込みに三沢から沖縄までの米軍基地を廻ったこともありました。嘉手納やグアム島の空軍基地から黒いジェット機がベトナム空爆に飛び立つのを見たこともありました。

そういえば、その頃は在日の英米人レップが何人かいたのを思い出します。彼らとはELT関係の仕事でもよくJALT, JACOS等の各地の大会で顔を合わせました。私自身、子供の時インターナショナル校育ちだったので、こういう環境は自然で快適であり、自分なりに良い仕事が出来たと思っています。

アメリカ大学出版局グループに移ったときは身の引き締まる思いでした。高いところへ飛ぶのだという高貴なモチベーションがありました。その頃の日本市場は、担当するアジアの国全体を10とすると日本は9という割合で、まだまだかなりの底力がありました。今は4対6と逆転しています。つまり日本経済が衰えた時アジアの他の国々で力が出て来たこと、特に大学のテキストブック・マーケットの力は目を見張るものがあり、学生の英語力の差がキーとなっていて思われます。それと教授陣の殆どが留学経験者であり、アメリカのテキストに慣れていること、自国にはまだ良いテキストが少ないという事などからも洋書が売れて

いるのでしょう。ちなみに私共のグループの中で今一番売れているテキストはMITのCormen: Introduction to Algorithm 2/eです。台湾だけで年間数千冊単位で出ております。

アジアの図書館事情はお寒い限りです。図書購入の大半は外国ジョバーを通し、ある程度現地の書店から購入される台湾などでは入札で決めるので書店による法外な値引き合戦が行われており、出版者側のディスカウントのみが頼りになります。大学出版社側も数年前までは、海外での経費を賄うと言う名目で、15%から20%のサーチャージを付けておりましたが、事情の変化により遂に撤廃となりフラット価格となったのですが、残念ながら日本を含むマーケット全体の売り上げ上昇には繋がりませんでした。

大学出版局は無利益団体でありますがある程度のセールス実績は要求されております。シカゴの元ディレクター Morris Philipson 氏の「ベストセラーは要らない」と言う有名な言葉がありますが、赤字を出すわけにはいきません。レップはマーケット全体の最終的な数字と向き合う責任があります。でも、商業出版社等と比較してその要求は大きな差があり、そのマナーは大変紳士的で、この点、個人的には幸運だったと思います。感謝しております。

ところで私のレップ生活の中での一番と思える出来事は、三人の子供の子育てが一段落した妻が（一番下の子が小学校に入学したとき）同じレップとして採用された事でした。彼女は独身時代外国生活も長く、結婚前に私と共に在日大使館で仕事をしておりましたので、パートナーとしての仕事の勘、呼吸も良くわかっていました。そして私の持ち合わせない能力も（ほんの少し）あり、助けられたことが幾つかあります。

大型出版物が出る度にパンフレットに載せる書評を取りましたが、彼女はかなりの大物（猪木正道、都留重人、武見太郎等）に交渉するのが得意でした。当時医師会長だった武見氏は大変気難しい方ではじめは難色を示していましたが、度々訪ねるうちに打ち解けて楽しそうに雑談するようになったそうです。

又、世界的に有名な著者（絵本作家 Ezra Jack Keats 等）を拙宅に招いたり、アメリカの学者 Noel Perrin 氏のバーモントの自宅に泊めて貰ったりしました。ダートマス大学の教授村であったクリスマス・パーティに招かれ、雪の降る中、異文化の粋を味わった思い出もあります。

アルバムを撮ると P. サミュエルソンと談笑しているもの、ノーベル化学受賞者を静かな和室で接待してる写真が出てきます。レップであったからこそ嗅ぐことの出来た薫り高いインテレクチュアルな世界、恩恵、それを仕事としてではなく人生の楽しみとして、しかも夫婦で味合えたことは本当に素晴らしい事でした。

海外出張も同伴で、毎年の AAUP の常連ペアとして顔を知られていました。AAUP の常連と言えば UPS の引退された斉藤さんをコンベンション・ホテルのあちこちのコーナーでクライアントとミーティングをしている姿をよく見かけました。日本人として絵になる人でした。

AAUP の特別企画の「ジャパン・ミーティング」が1990年フィラデルフィアであり、日本からは丸善の尾内さん（現在 USACO）、紀伊国屋書店の奈尾さん、UPS の斉藤さんがパネリストとして招待され、日本マーケットに付いての紹介・ディスカッションがありました。会場には紀伊国屋 N.Y. の筆保さん、USACO の部長さん達も応援に来てくださって大変盛り上がり、意義のある会となりました。協会史に残るイベントだったと思います。今でもその時配られた資料を保管して参考にしてしていると聞いたことがあります。

神田のすずらん通りを歩くとタイムスリップしたような錯覚を覚えます。ターンテーブル・パーキングビルの三階に Collier Macmillan のオフィスがあり、その前に中央洋書、その近くに Harper & Row、日貿ビルには Addison-Wesley、Feffer & Simon、Butterworth 等々たくさんさんのレップのオフィスがあり、活気に溢れていました。時代の変化にともない、その殆どが神田村から消えました。神田村の村長さん（日貿の故村山社長）の茶目っ気たっぷりユニークな采配によりレップ達は和気あいあいとしておりました。

これから「本」という形態自体がどう変わっていくのか.....やがてエレクトロニクス出版が本流になるかも知れませんが、それはそれとして本は永遠にあり続けて行くと思いたいです。

12月末日で私たちは退くこととなりますが、この難局を開けるフレッシュな人材に期待したいと思います。大学出版局の理念を更に深く市場に浸透させて欲しい、そう願っております。

最後に長年にわたりご親交頂いた書店、協会、諸レップの皆様へ心からの感謝を申し述べるとともに今後の発展と成功をお祈り申し上げます。



◆ フランス文化省書籍部 「海外書店向け援助金制度」のご案内

皆様はフランス文化省に書籍部：CENTRE NATIONAL DU LIVRE (CNL) という機関があるのをご存知でしょうか。CNLはフランス書籍出版物の国内外プロモーションのため多岐にわたる活動（出版、翻訳出版、輸出などの分野）を行っております。

そのひとつが海外のフランス書籍取り扱い業者に対する援助金制度です。これまで日本は対象外でしたが、数年前より我が国も制度適用リストにあがり、現在までこの制度が適用された洋書輸入業者は協会の会員非会員あわせ10数社となっております。

この制度が適用されますと、基本的には仕入れ価格の50%までが援助対象となります。

この制度の適用要件は次の通りです。

- ・いかにフランス出版物の拡販を行うか
- ・過去におけるフランス書籍の取り扱い実績（実績皆無でも応募資格有り）
- ・会社概要、自社紹介アピール
- ・フランス大使館文化部文化参事官の推薦状
- ・注文予定書（出版社発行見積書）などが必要となります。

応募、審査は年2回行われます。

詳細はビューローホソヤでもご説明いたしますが、日本での手続きはフランス大使館文化部書籍担当官経由となります。仏文にての書類作成は小社、および大使館担当官がサポート致します。

またCNLではフランスにおいての書店研修制度、パリブックフェア（毎年3月）への招待など、以前より縮小したとはいえ文化予算を積極的に活用しております。ちなみにフランス出版物輸出統計によりますと、日本は2002年度輸出先国全世界ランク第16位となっております。フランス語圏のベルギー、スイス、カナダ、アフリカ数カ国、海外領土県（DOM,TOM）などで全輸出（約6億3千万ユーロ）の68%程をカバ

ーしているなかで、日本のランク16位は非フランス語圏、しかもアジアの国として立派なものといえます。

アジアでは韓国、台湾などが2001年までここ数年間急上昇し、日本の数字に迫る勢いでしたが、2002年にはこの2カ国は各々前年比75%、44%マイナスという不可解な現象を示しています。

援助金制度、又は輸出データについては下記までお問い合わせください。

ビューローホソヤ 細谷愛子

mailto:brhosoya@poplar.ocn.ne.jp

投稿：ビューローホソヤ 細谷愛子

<協会ウェブサイトでもご覧いただけます。>

◆ 米ミネソタ州下院議員、Open Access を擁護する新たな学術論文著作権法案を提出

米ミネソタ州のマーチン＝サボ下院議員は6月27日、学術論文の著作権法を改訂する法案（Public Access to Science Act）を連邦議会に提出した。この法案が可決されると、連邦政府からの助成金によって運営されている研究の論文発表は、無料で公開されることになり、図書館などからの購読費で運営されている学術出版社は大きな痛手を負うことになる。

サボ下院議員は自身のホームページ上で、「（乳がんの患者や）難病を抱えている子供の家族が、自身の税金で成り立っている研究データのために、購読料を支払わなければいけないのは間違いである」と、連邦政府から助成金を得ている研究データまでもが課金の対象となる現実を非難し、無料公開を訴えている。

今回この法案が議会に提出された背景には、Open Accessジャーナルを推奨するPublic Library of Science（PLoS）の強い働きかけがあると言われていいる。PLoSは世界中の学術論文をインターネット上で無料公開することを目的として、2000年に科学者たちによって設立された非営利団体で、Gordon and Betty Moore財団からの900万ドルの助成金で運営されている。同団体はすでに、生物科学系の論文を集めたオンラインジャーナル「PLoS Biology」を今年の10月から公開することを決定しており、来年には医学系のオンラインジャーナルもリリースする予定である。

これに対し、このような活動の有効性に疑問を投げかける声も少なくない。American Institute of Phy

sicsのCEO、マーク＝ブロスキー氏は「(Open Accessジャーナルを推奨する人々は) 学術情報を集積して吟味し、インデックスを付与してアーカイブ化するのには費用がかかるということを理解していない。特にインターネット上で出版物を提供するには、莫大な費用がかかる」と指摘している。実際、PLoSのジャーナルに論文を投稿するには、1500ドルを同団体に支払う必要があり、Open Accessジャーナルに賛同している研究者もあまり積極的に論文投稿を行えないのが実状だ。

しかし、BioMedCentralのヤン＝ベルテロブ氏が指

摘するように「Open Accessという概念が社会利益として広く認識された」ことは明らかであり、有力な議員たちの賛同を得ているこの法案が可決する可能性は高い。学術出版社がこれに対してどのような防御策を図るのか、今後の動向が注目される。

提供：ユサコ㈱

〔ユサコ ニューメディア ニュース、No.132、2003/07/31〕

<協会ウェブサイトでもご覧いただけます。>

うちの会社

カラーフィールド有限公司

Colour Field Incorporated

東京都渋谷区宇田川町12-17 プロトビル4F

Tel : 03-5784-0801 Fax : 03-5784-0808

e-mail : bookshop@colourfield.co.jp

URL : <http://www.colourfield.co.jp>

「海外の優れた文化を日本に。色彩豊かな生活を世界からあなたへ。」弊社カラーフィールドの経営理念を挙げるとこのようになります。1997年創業の弊社は、生活雑貨の貿易商社としてスタートし、通販カタログ「美しい暮らしカタログ」を発行してまいりました。

1999年からはその中で特に反響の高かったビジュアルを中心とした洋書に特化し、洋書専門通販カタログ「アートブックショップ」を発行するようになりました。現在通巻27号まで発行しその部数は28,000部です。購買層はアートやクラフトを趣味に持たれる主婦やカルチャーセンターに通うOL等が中心で、ツールペイントやパッチワークキルト等のアート&クラフト本が弊社の主力商品といえます。

通販の他、日本各地で開催される手づくりフェアに出店し、特に地方の方からは、直接手に取ってご覧いただくことがなかなか無いと大変喜ばれております。今年の秋は「アートブックショップ バーク

ンブックサーキット」と名付けて、60日間で全国の手づくりフェアやクラフトショップ11箇所を回り、たくさんのお客様に直に販売いたします。この催事販売は今後も活性化させていきたいと考えております。

仕入れに関しては、欧米のブックフェア、リメイnderフェアを中心に直接仕入れておりますが、当協会加盟を機に会員の皆さまとお取引させていただき、さらに幅を広げたいと願っております。

蛇足になりますが、弊社は洋書輸入販売以外の事業も手掛けております。まだ駆け出しではありますが、翻訳出版や写真集の発行、自費出版請負、海外音楽家のCD制作やコンサート招聘などクリエイティブな活動を目指しています。細分化が進むお客さまのニーズに、迅速かつ柔軟に応えこれからも発展し続けたいと考えております。

佐久間達也

第43回 麻雀大会

第43回麻雀大会が去る8月8日（金）東京駅八重洲北口前の雀荘「中信」で開かれました。このところすっかり中高年男性の遊びとも言われる麻雀、我が業界（協会）においても同じで、参加者も盆休み前とあって16名と少なく、麻雀を通して人脈ならぬ“雀脈”を作り上げ、それを仕事にも役立てて来たと言えるようなベテランばかり。聞くところによれば当大会を始めたころは会員も多かったとは言え200名を超える参加者があり大きな雀荘を借り切って開いたとか、実に寂しい感じも致します。私が週末に通う碁会所では小学生と定年でリタイヤしたおじさんが仲良く囲碁を楽しんでおります。テレビアニメ・漫画の「ひかるの碁」による空前の囲碁ブームによるためです。そんなブームが起きない限り麻雀は廃れて行くのでしょうか。もっと若い人達の参加を期待したいものです。今大会は鶴竜次氏（東亜ブック）が前回42回大会に続き“二連覇”。「次回も優勝を狙います」と頼もしいスピーチでお開きになりました。

入賞者は以下の通りです。

優 勝	鶴 竜次（東亜ブック）	67点
準優勝	永棟 隆司（丸善）	56点
第3位	鶴 三郎（東亜ブック）	53点
ブービー賞	高橋 紘（事務局）	- 64点

〔株友隣社 上原鉄男〕

フォーティラブ夏の陣

と き：2003年8月30日（土）
ところ：グリーンテニスプラザ（川口市）
参加者：13名（内女性3名）

8月30日（土）朝から曇り空でなんだかこの夏はお盆の大雨といい、夏らしくない夏です。小生は午後から参加させて頂くべく、コートに参りますと高校のテニス部並みの白熱した練習風景。美女が3人も混ざるとボールのスピードにも勢いが増して見えるのは小生の思い過ごしでしょうか。

小社の初代社長鈴木富夫が「フォーティラブ」にお世話になりました縁でしょうか小生も仲間に入れて頂き、今回で2回目の練習となりました。

練習が終わりシャワーを浴びると、陽の落ちた涼しい木立ちに共鳴する蜩の声にやっと夏を感じられました。そこは、軽井沢のテニスコートにいるかのような錯覚に陥ったものです。とても草加とは感じられませんでした。草加もいいところではありますが。そのような中、炭火バーベキューパーティーのはじまりはじまりです。

〔株式会社ミロブックサービス 堀井俊之〕

新・パソコン外論考(其39)

宇田川一彦

Lullaby of Birdland/バードランドのあやし歌

■夫子喟然歎曰、吾与点也、

'The Master sighed and said, "I am all in favour of Tien."

(論語 / 先進篇・Confucius; The Analects/Book XI)

【超拙意訳：先生は、ふーっ、と溜息をついて、言われた。「私は、点(曾皙)の考えに与するよ。」

【外注：先々号からの続き。多弦の琴を、置いて答えたことに、孔子が、前の三人の考えについては、その時点でいっさいコメントしませんでした。が、この点の意見には、孔子が即座にコメントしました。このあと退席するときに、点が、孔子に尋ねたことに対する返答(この章の最後に締めくくり)は、次号で。】

Personal Computer と Software について - 3 -

パソコンが勝手にシャットダウン。しかも、むっくり再起動するという、何ともこしゃくなウイルスに、筆者のOS(WinXP-Home Edition)がやられました。WORM_MSBLASTです。

アプリケーションソフトやデータ類が、ボロボロ壊れない、ある意味では良質のものと思いました。しかし、インターネットに接続した途端に、気がつけば、「あと55秒でシャットダウン」といわれても……。

ウイルス警報については、緊急(critical)、重要(important)、警告(moderate)、注意(low)と4段階あるとのこと。今回は、いちばん緊急最高度の「critical」警報がでていたそうです(そんなもの見たときは、「時すでに遅し」でした)。

問題は、この後の対応です。このWinOS提供会社は、自社サイトにある修正プログラムをダウンロードしてください、とのこと。何をいわれる、ダウンロードしたくても「勝手に数十秒でシャットダウンする」のに、と抗弁。「……(無言)」、筆者も諦観・驚愕して開いた口が、塞がらず「……(無言)」

茫然としていても、インターネットにアクセスできるわけではありません。気を取り直し、一日棒に振って、パソコンを購入した某大手量販店に出かけました。顔見知りの店員の方を探し、事情を説明。「そうゆうことでしたら、私が、昼休みにそのサイトにアクセスし、ダウンロードします。申し訳ないけど、そのプロ

グラムを焼く板(CD-R)おもちですか。じゃ、それだけお店で……。10枚一金298円(税別)で、CD-Rを購入。午後2番ぐらいに、彼を尋ね、焼き付けた板を貰いました。

帰宅後、プログラムをインストールしました。いかなる手間もいりません。OSのこれとこれのアップデート済みか、どうかのチェック項目をクリックします。筆者の場合は、先号で既述しましたように、一度もアップデートしていませんので、すべてにチェック(クリック)して、エンターキーを押すのみです。いわゆるエクゼファイル(…….exe、自動実行ファイル)です。この間、約1分足らず。以降現在まで、再起動せずになんとかインターネット、メールのやり取りもできるようになっています。実質、被害日数は、3日でした。それにしても、数版バージョンアップして、且つ細かい修正は数知れず。いまだに通信ポートにセキュリティホールが、存在するとは……。

このヴァイラス騒動の教訓。まずは、ヴァイラスにやられたら、騒がないこと。そして、近くの親戚(OS提供者)よりパソコンショップの赤の他人(懇意にしていればなおよし)に頼ること。安全は、他人の善意で守られます。“When in doubt, do nowt. A relative in need is a complete stranger indeed.”(本来は、原稿作成とinternetによる原稿送付の手順の予定でしたが、次号で。)

Internet について(博物館海外編 - New York 8 -)

アメリカ自然史博物館(American Museum of Natural History=<http://www.amnh.org>)の3回目。

▲自然史博物館の3階。M..ミード(Margaret Mead)のHall of Pacific People(太平洋の人びと)の部屋から左手に2つ目の小さなコーナーPrimates(霊長類)の前です(ミードの部屋のことは、次回にでも思っております)。2組の親子(小学1年ぐらいか)が、熱心に親から説明を聞いています。親は、展示物の前にある解説文を読みくだいているのです。5千数百万年前のネコぐらいの大きさのウマの先祖の骨格標本のの前では、「うそでしょう!ほんと!」といった驚嘆の声を子どもたちが発していました。テナガザルやチンパンジーの骨格標本、なかでもサルからヒトへの過程を実物大骨格標本で観察できます。自分の背丈とゴリラの標本と比べる子どもの生き生きした顔が、印象的でした。(この項続く、乞ご期待)

洋書の歴史雑記帳〔XXXVII〕キリシタン版の原書(11) 鈴木 陽 二

長崎(5)

長崎県には国宝・重要文化財の指定を受けた教会が五つある。前回触れた久賀島には、国重文の一つ「五輪教会」がある。「牢屋の窄」から自動車の通らぬ山越の道を小一時間ほどたどった島東の海浜にあるのだが、普通は船で海から直接赴く。そこには、2～3軒の民家が見られるだけの荒涼とした風景が広がり、荒れると波を被りそうな岸壁近くにその教会は建っている。明治14年建築の五島最古の木造教会で、潮さびて白茶けた下見板の壁は民家と見まごうような外観だが、ゴシック風の窓と切妻屋根に掲げられた十字架が教会堂であることを知らせてくれる。窓のステンドグラスはまだ美しさを失っておらず、蝙蝠天井にゴシック風の祭壇など、全体がゴシック調の内陣は何もかも古びて、質素ながら荘重で、しじまの中に沈殿していた。五島の教会やキリシタン史を手短かに語ることは難しいが、ある調査では長崎県に139の教会が存在し、そのうち五島には55を数える。信者でもないのに、それらの教会を結構訪ね歩いた。教会建築が好きで、外国でも出張の合間に教会を訪ねることがあって、その荘厳・華麗なこと、また歴史の重さで、五島の教会など遠く及ばない。しかし、遠藤周作が『沈黙』で「主よ海があまりに碧いのです」と記した西海の明るい海景の中で、島々の小さな教会は、悲しげに、はかなくみえて、壮麗なカテドラルでは味わえない感動を、訪れる人々に与えずにはおかない。

すっかり横道にそれてしまったが、幕末・明治初期に発行されたプティジャン版と呼ばれるキリシタン版について、幾つか拾って紹介しておきたい。

プティジャン(B.T.Petitjean)はパリ外国宣教会から派遣されて1860(万延元年)に来日し、長崎に布教の拠点を構えた。彼は復活キリシタンの教導のために隠れ切支丹が守って来た伝統語による教本を編纂し、またキリシタン古版を発見・書写した。諸外国の圧力により明治政府がキリシタン禁制の高札を撤去したのは1873(明治6年)だが、それまでもプティジャンによる秘密出版は21種類に上った。

幕末にカトリック教理入門書として『聖教初学要理』を著し、当初信者の間で写本で流布したが、1868(慶応4年)には木版で印刷され、続いて1868(明治元年)

には和装石版刷りの『聖教日課』を刊行した。1869(明治2年)には特に多くの出版を手掛けた。教会祝日表の『瞻礼記』、ローマのカサナテンセ図書館で発見した『サルバトールムンジ』を書写してその改訂版『校正再刻 とがのぞき規則』を上海で石版刷りした。やはり同年、痛悔の心得を記した書『こんちりさんの略』を刊行したが、これは1603(慶長8年)に出版された刊本未発見の隠れ切支丹伝承写本で、その仮名書き写本に漢字を当てて復刻したものである。またマニラのフランシスコ会修道院所蔵の1623年版原書を漢字仮名交じり文に改版した、聖母に対する祈祷書『ロザリヨ記録』、同じく古いキリシタン版の石版刷り和装本でミサ拝領の心得を解説した『彌撒拝礼式』、十字架の道行について記した『御久類壽道行のおらしよ』、など次々に上梓した。マニラでは、1607(慶長12年)長崎刊行のキリシタン版『スピリツアル修行』を入手し、それを部分的に翻刻した『後婆通志与』を1873(明治6年)に刊行した。そして、キリシタン解禁後、1883(明治16年)に復活キリシタンの教理問答書『切支丹の聖教』が和装で刊行された。これは最後のキリシタン版といわれ、初版は1877(明治10年)に大浦天主堂で刊行された洋装本だった。

これらプティジャン版は、大部分、彼と共に来日したド・ロ神父(M.M. De Rotz)が大浦天主堂に設けた石板所で印刷したものだという。ド・ロ神父は後年外海(そとめ)に赴いて司祭として貧者の救済など、布教活動を行った。外海は遠藤周作が『沈黙』の舞台にしたところで、角力灘の荒海を望む断崖のわずかな切れ目に、家々が肩を寄せ合っている集落で、神父が建築した木造の古ぼけた大野教会(県指定文化財)や白亜の出津教会、救助院などを見ることができる。救助院では助産事業を行い、貧しい人々の食料のためにそうめん、マカロニ、パンなどの製法も教えたという。

16世紀大航海時代に西洋文明に接し、日本は400年以上も前に高度な学術を受容した。その内容を知りたくて、浅学をはばかりキリシタン版の原書を調べて見たが、当然、学問的と言えるものではないことをご容赦いただきたい。〔参照文献：海老沢有道『切支丹典籍叢考』/『日本キリスト教歴史大事典』〕

(元丸善・本の図書館長)

Proceedings of the National Academy of Sciences (PNAS)

Editor-in-Chief: Nicholas R. Cozzarelli

ISSN: 0027-8424 (Print Edition) 1091-6490 (Online Edition)

(National Academy of Sciences)

2004 年より PNAS はオンライン・サイトライセンス を主体に大きく生まれ変わります。

刊行頻度も 隔週から 週刊 に変わります

- 法人でご購読の場合は、お客様のタイプ、規模、利用者総数など、更に階層分化された価格設定となっております。
- 個人購読の場合は従来通り、**Print + Online** の形態となっております。

世界トップクラスの雑誌の多くは一緒に冊子体からオンラインあるいはサイトライセンスへと移行しつつあります。

PNAS のサイト・ライセンス契約に際しましては、

- ★版元が予め用意した国内諸機関、大学、病院等の規模、研究者やユーザー総数に応じた価格を決定します。
- ★ライセンスの著作権は版元が保有し、契約を頂いた場合は所定のサイト、登録された IP アドレスの範囲内のみでのアクセスが義務付けられます。

各階層の内訳、価格体系および冊子体を追加される場合、その他ご不明な点は弊社マーケティングセンターまでお問い合わせ下さい。ご注文の際は正確な情報をご提供下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

日本販売総代理店 **ユサコ株式会社**

マーケティングセンター 〒106-0044 東京都港区東麻布 2 丁目 17 番 12 号 www.usaco.co.jp

Tel: 03-3505-3256 / Fax: 03-3505-6282 / Email: marketing@usaco.co.jp